慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	森雅子 『神女列伝 比較神話学試論2』
Sub Title	Masako Mori, The goddesses in early China - a comparative study of Chinese mythology II
Author	桐本, 東太(Kirimoto, Tota)
Publisher	三田史学会
Publication year	2015
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.83, No.4 (2015. 1) ,p.133(449)- 141(457)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20150100-0133

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

森　雅子『神女列伝　比較神話学試論2』

桐本東太

本書は書名にも記されているとおり、著者による「比較神話学」の第二弾である。本書は以下のように構成されている。

第一部
第一章　神女列伝：中国古代における地母神の残像（一）
第二章　醜女伝：中国古代における地母神の残像（二）
第三章　二女伝説：日月の母への回帰
第四章　執り成しの女神：天界への道に関する一考察
第五章　山鬼考
第六章　月精：月に住むもの
第七章　聖婚の花嫁
第八章　中国の女神：その分類と比較
第二部
第九章　西王母の原像・再考
第十章　女媧原始・再考
第十一章　サホヒメ伝説考：日本神話の比較研究一試論

右にあげた各論は、「比較神話学」と銘打っているとはいえ、世界中の神話を比較研究の俎上にのせたものではなく、主としてメソポタミア・オリエントの神話を中国の古伝承と比較することによって、中国古代神話に関する新たな解釈を提示しようと試みたものである。その際、第一部には主として、メソポタミア・オリエントの

神話を、中国神話の「原像」を復元するためのアナロジーの素材として利用したものが収められており、第二部には、両者の間に直接の伝播関係を想定した論文が収録されている。

それでは以下、各論文の内容を要約しながら私の見解をさしはさむというかたちで、論を進めてゆきたいと思う。

まず第一章から作業に着手しよう。本章で著者はまず、かつて中国・日本の学界では、中国古代史研究の舞台にあって、地母神の存在すら認められていなかったことを慨嘆すると同時に、最近の考古学的発掘の進展により、妊婦の様相を写し取った土偶が次々に発見されたことによって、従来の学説は完全に破砕されたことを指摘する。そして中国古代の文献に見える五名の女性が、彼女たちを収録した古典の中では、全くその名残をとどめていないが、かつては地母神としての性格を持っていたことを主張している。

第二章では『列女伝』などに登場する、極め付きの醜女や美女が、「太古の大女神・大母神もしくは地母神が内包していた両価性、すなわちアンビバレントな性格」（五二頁）を反映したものであるとみなし、彼女たちが「古代中国における地母神の残像」（五五頁）であったとの主張を展開している。

続く第三章において、著者は中国古代の文献に頻出する「二女」つまり「二人でペアになった女性」の伝承に注目し、「彼女たちをかつて「日・月の母」と呼ばれていた大いなる女神として解釈する」（七一頁）。私見によれば、著者が「二女」の伝承に着目したのは、さすがの慧眼と言わざるを得ない。なぜなら中国古代文化史の研究史上、この「二女」を真っ向から取り上げた論文はまことに希少だったからである。しかし著者自身も明記しているように、中国古代には、諸侯間の婚姻にあたって、二人の姉妹をともに嫁がせる風習があり、「二女」に関する記述のかなりな部分は、この脈絡で解釈することが可能だと思われる。著者の反論に期待したい。

第四章の「執り成しの女神」は、その題名からしてやや抽象的に過ぎるが、副題となっている「天界への道に関する一考察」が明示しているように、人々が地上から天空の世界に飛翔しようとする時に、その仲立ちの役割を果たしてくれる女神たちについて考察した論文である。「取り上げるのは女祭・女戚、雨師妾、赤水の女子献、そして女丑（の尸）の四例である」（九五頁）。しかしな

がら著者は「おわりに」の項で、彼女たちが「現存する資料からだけではいかなる神格、属性、機能を有する女性であったかを推測することは困難である」（一〇〇頁）と述べている。結論がこの感触であるから、論文の本体がいかなるものであるかは大体想像がつく。彼女たちが「執り成しの女神」であることを論証しようとする試みは、失敗していると言わざるを得ないだろう。

それでは第五章。

『楚辞』の「九歌」に山鬼という不思議な詩がある」（一〇七頁）。この山鬼とは奥深い山中に住まう女神であり、一年の、ある定まった祭礼の日に山のふもとに存在する村落に降りてゆき、村で選ばれた若者から求愛され、「彼を受け入れることによってその年の田（畑）の実りを豊かにすることを約束すると考えられていたのであろう」（一一一頁）。そして「この祭祀において山の女神から田（畑）の女神へと変貌し、豊穣・多産を約束する「聖婚の花嫁」として信仰や崇拝の対象とされた時代があったことが窺われるのである」（一一二頁）。しかしそうした祭祀儀礼は時の移ろいとともに変貌を余儀なくされ、やがて山鬼は山中を根城とするおどろおどろしい妖怪へと変化してしまう。

こうした著者の仮説には、かつて日本民俗学界で盛んに議論されたテーマと響きあう興味深い論点が秘められている。それは我が国において、山の神は田植えの季節になると山から降りて来て田の神になり、秋の取入れがすむとふたたび山に帰還して山の神になる、といった観念が見いだされることに端を発している。このテーマに取り組んだ民俗学者たちは、朝鮮の山の神信仰にも、こうした側面が見いだされるか否かについて、盛んに討論を交わした。しかし、その際に比較研究の素材として、中国は完全に蚊帳の外であった。理由は簡単である。当時の中国には竹のカーテンが張り巡らされていたからである。しかし中国が外国人にとって開かれた国になっても、こうした視点から中国の稲作儀礼を検討した研究は、ほとんど皆無に近い。著者が展開した議論は図らずも、この「古くて新しい」問題の、新たな発火点となる可能性を秘めている。そうした意味で第五章は、示唆するところ大なる論文といっても過言ではない。

続く第六章は、やや羅列的な方向に傾いた論考である。冒頭において著者は、中国古代神話の中で、太陽に関する神話は比較的豊富であるが、それと比較して、月に対する神話が決定的に少ないことを確認する。総数たった

三話。まず冒頭に挙げられるのは、月の中にはウサギが住んでいるという神話である。『楚辞』天問篇が初出となる。次は『山海経』に初めてその姿を現す、常羲である。彼女は『山海経』の記載によると、月を産んだ、文字通り月の母であり、同時に天空を駆けてきた月に湯あみをさせる神として描かれている。三番目は呉剛という男に関する神話であるが、彼についての物語は、唐代になって初めて著録されたものであり、前二者に比較すると、はるかにその時代がくだる。彼は仙人になるための修行を積んでいたが、その途中で何らかの過ちを犯したため、月の中に閉じ込められ、そこに生えている桂の木を斬るという罰をこうむった。桂はいくら斧を振りかざしても、切った場所があっという間に元の姿に戻ってしまい、ために呉剛は永遠に月の世界から逃れることはできないという宿命をおうことになった。

この三話のうち二番目に紹介した常羲の神話が、彼女を月に住まう絶世の美女であるという話しに変貌し、さらに他の二つの説話を圧倒して現在にまで伝わっているというのが、著者の結論である。

第七章はまず、「聖婚」に対する定義からはじまる。「聖婚」の概念をもっとも幅広く規定すると、それは、「男神と女神の結婚」「男神と人間の女性との結婚」「女神と人間の男性との結婚」の三者に分類される。著者は、この中から最後の定義に該当するものを、シュメールの神話から抽出し、それを中国の西王母の神話などと相互照射させることによって、中国古代神話に新たな角度から照明をあてようと試みている。シュメールの神話では、女神イナンナとシュルギ王の聖婚が最も著名であり、そこに見えるモチーフは以下のごとくである。

まず、王が莫大な贈り物を携えて都から出発する。ついでシュルギ王を待っているのは長い旅路である。その結果ついにイナンナの神殿にたどり着いた王は、イナンナに対して、膨大な量にのぼるプレゼントをする。イナンナはそれにこたえてシュルギ王と性的な関係を持ち、その結果として彼の王国の繁栄を約束する。

著者は、この物語を『穆天子伝』に見える西王母と穆王の、出会いと別れをめぐる神話と比較し、両者が完全に吻合することを指摘することによって、長く謎の書物とされてきた『穆天子伝』に斬新な解釈をほどこした。続いて著者は、第五章で取り上げた山鬼、それから牽牛・織女の物語の核心部も、同様に聖婚のモチーフにあるとする。妥当な見解であろう。

さて第八章は、中国の女神事典ともいえるものであり、アイウエオ順に、中国の女神について、簡潔にして要を得た説明がなされている。周知のごとく、このような「中国の神様事典」は、特に中国本土で今までも少なからず出版されてきた。しかし、その多くは現代社会で崇拝されている神格を扱ったものであり、本章の構成が古代に比重を置いているのとは、いちじるしい相違が認められる。本章の意義もこの点に求められよう。

とは言え、手放しで賞賛ばかりしているわけにはいかない。なぜか？　それは本書が一般向けの書籍ではなく、専門書であるという一点に尽きている。研究者が、この事典を手に取った時、一番知りたい情報は何であろうか？　それはおそらく、一人一人の女神たちが、一体いかなる文献に登場してくるのか、という出典の所在にあるといっても過言ではあるまい。言うまでもなく著者は、大項目について、該当する古典の資料を、明快な日本語の文章に翻訳することによって、その責務を果たしている。しかし残念なことに、中・小の項目については、そうした配慮が、ほんの若干といえど、なされていないきらいがある。本章の瑕瑾とすべきであろう。

さて、いよいよ第九章にはいる。ここから最終章までは、伝播論にもとづく論文が踵を接しているわけだが、これを紹介、批評してゆくという作業は、評者にとってまことに苛酷である。具体的には、以下の評者の文章を目で追っていただければ、評者の複雑な心境の一端を理解してもらえるものと思う。

まず本章は、西方のセミラミス伝承が中国に流入し、西王母神話の形成にあたって多大な影響力を行使したことを主張する論文である。セミラミスは実在の女王であるが、「極論すればその神格化は当時のオリエント世界で名高かったあらゆる地母神の習合によって完成している」（二三〇頁）。そしてこの地母神としてのセミラミスと西王母との類似点は、著者によると、以下のごとくである。セミラミスは「男とも女とも見分けのつかない服装」をしており、「ハトに養育され」「その死に際してはハトに変身して飛び去った」（二三九頁）。こうした彼女の事績の一つ一つが、西王母が、「勝（かんざし）・杖を戴」き、「三青鳥」に自分の食料を調達させ、しかも「その始めを知るなく、その終わりを知るなし」（二三九頁）という存在であることと見事に符合しているというのである。一体これらの記載のどれが同一であるといえるのか、私は読者に問いたい。例えばセミラミスの両性具有的な

「服装」に対応するのは、西王母の「かんざし」と「杖」であるが、「かんざし」は女性の着用するもの、また男女ともに「杖」をつく人物はいるだろう。さらに著者によると、セミラミスは「男勝りの戦士であり、戦略家であり、大侵略者であった」（二二九頁）。ところがこうした彼女の特色は、西王母には全く見られない。おおよそ伝播論を行使するにあたっては、説話の異同点をも考慮にいれなければなるまい。

こうなってくると、「（セミラミス伝説が）極めて断片的であり、時には原型を止めないほどに粉飾が施され、中国化されていたことは言うまでもない」とか「セミラミス伝説と西王母との間にはある決定的な違いがあることもまた事実である」（両者とも二三七頁）という著者のセリフが何か空虚なものとして響いてくる。「両者に伝播による関係性は認められない」というのが無難にして妥当な落としどころであろう。

第十章は、シュメールのナンム、バビロニアのティアマト、特に前者の神話が中国に伝播し、女媧の神話を形成したことを述べたものである。ここでは叙述の便宜上、最初に、著者による結論部分を、そのまま引用しておこう。

彼ら（ナンムと女媧）は、原初の、彼らの前には何者も存在しない「始原の存在」であり、神々の世界に君臨する「至高の女神」「絶対者」であり、全ての「神々の母」であると同時に「怪物・怪獣の母」である。また、彼らは天界と大地の創造に関与する万物の「創造女神」であり、「海の女神」であり、それ故に「龍蛇の姿態を持つもの」である。そして何よりも彼らは粘土や土による「人間の創造」に関与する者であり、しかもこの「人間の創造」という機能においては最初は成功し、ついで失敗作を創り出しているという点で、両者の類似は決定的となり、一方が他方に伝播し、受容された関係は疑う余地のないものとなったと考えられるのである。（二六一頁）

まず「始源の存在」という点であるが、これがナンムと女媧に共通する性格であることは否定できない。ただしナンムには「原初の海」という属性があるのに対し、女媧にはこれがない。また中国古代神話においては「至高の女神」は、むしろ西王母に帰せられる地位ではあるまいか？　続く「神々の母」「怪物・怪獣の母」という個所は、両者の共通点として認めてよい。ただし、つづ

く「創造女神」に関しては、『説文』の「女媧は古の神聖な女性であり、万物に化した者である」という記述を著者が拡大解釈したものであり、これを真実と認めることはできない。ついで「海の女神」については、著者自身が、「女媧の場合にはこの「原初の海」「海の女神」という神性や神格を明確に表現している文献資料は見出されない」（二五八頁）と告白しているのだから、これ以上の追及は無用であろう（蛇足であるが、「太一生水」などはナンムの神話と相互照射が可能な新出土資料ではないだろうか）。つぎは「龍蛇の姿態を持つもの」であるが、女媧がこの条件に該当するのは間違いないとしても、ナンムが果たして「龍蛇」の姿に身をやつしていたか否かは、本論文を精読する限り不明である。最後の「人間の創造」および「失敗作」の造作については、ナンムの場合、彼女は直接的な関与はしていなかった点が疑問として残るが、著者の指摘はおおむね妥当である。

このようにして著者の論点を整理してみると、ナンムと女媧の伝播関係については、これを無下にしりぞけるわけにはいかないと思う。ただ公正な審判から見ると、セーフかアウトかギリギリのところであろう。

「伝播」関係の論証は、まことにむつかしい。

こうした傾向は、第十一章において、とりわけ顕著にあらわれる。著者は、大林太良・吉田敦彦両氏の驥尾に付し、「印欧語族の神話が日本神話に伝播し、影響を与えた可能性を検証」するため（二七三頁）、北欧神話を収録した「ブォルスング・サガ」と『日本書紀』のサホヒメ説話を比較し、両者の伝播関係を証明しようと試みている。

サホヒメの物語とは、おおむね以下のごときものである。

サホヒメは垂仁天皇の寵姫であったが、実の兄に愛情をいだき、兄の命令どおり天皇を殺害しようとする。しかし、これを果たさず、最後は兄のもとに走って稲を積んで築いた城に立てこもる。そして火を放たれた稲穂の中から、生まれたばかりの赤子を抱いて、天皇方の軍隊の前に姿をあらわし、子供を託すると、燃えさかる稲穂の中に飛び込んで焼死してしまった。

一方「ブォルスング・サガ」の対応部分はこうなっている。

ブォルスング王には、シグムンドとシグニューという双子の兄妹がいたが、ゴートの王シゲイルがシグ

ニューに求婚し、彼女を連れて帰国する。その後シゲイルはヴォルスング王一族を自己の城館にまねき、彼らを皆殺しにする。生き残ったシグムンドはシグニューとまじわり、シンフィヨトリという英雄が生まれる。シグムンドとシンフィヨトリは、シゲイルの館に火を放つが、シグニューは燃えさかる館に身を投じ、自殺する。

ざっと以上のような具合であるが、この両者が「酷似」しているとは、私にはとうてい考えられない。繰り返しになるが、説話の比較研究においては、二つの説話の間に横たわる、相違点にも配慮しなければならないであろう。この場合「伝播論」は成り立たない、というのが私の結論である。

さて、ここまで『神女列伝』の概要を紹介してきたが、最後に私の総括的な感想を述べて、本書評を締めくくろうと思う。

まず第一に、これは第二部のみに干渉することであるが、なぜ「伝播論」か、ということが議論の俎上にのぼせられることと思う。ちなみに著者が私淑していた伊藤清司氏は、日中比較説話学の、国内における最高の権威者であった。ただ氏の場合、中国と日本の神話や伝説に対し、これをいたずらに比べるだけではなく、そうした類似の話種の背景にある世界観の考察、あるいは稲作などの具体的な生産技術の実態の究明を、その最終的な目的としていた。この点においてのみ考慮を及ぼすならば、著者の比較神話学は空虚である。しかし実を言えば、私は著者を批判しているのでは全くない。それは次の様な枕があるからである。人類学専門の某教授がなげいていた。「人類学学説史の授業を担当すると気がめいるね。なんたって構造主義云々の講義をしても学生から出るのはあくびばかり。ところが伝播論になったとたん、彼らの目がかがやきはじめるんだからさ」。さもありなん。伝播論は純粋に好奇心の産物なのだから。ここでニーチェの『喜ばしき知恵』を想起するのもよいだろう。要するに著者は百パーセントの好奇心だけを心の糧にして今まで研究を続けてきたのである。これは素晴らしいことではあるまいか。私は賞賛して止むところを知らない。これが第一点。

つづいて二点目。本書の後半に収録された三篇の論文は、神話・伝説の伝播を述べたものであるが、伝播の方向は、おしなべて西方世界から中国へ、という形で設定されている。なぜ著者は逆の可能性を考えなかったので

あろうか。つまり中国で生まれた神話・伝説がシュメールやギリシャに伝わったという方向性の提示である。ただし、中華専制帝国文化出自主義とでも呼称すべき、この仮説はいたって評判が悪い。卑近な例を挙げると、中国人の人類学者が少数民族の調査、とりわけ宗教面の調査を行っている時、正体の明らかではない事象に出くわすと、「これは中国の影響だ。おそらく道教から来たものだろう」と断定して、それ以上は踏み込んだ考察をしない、という話しを仄聞している。「道教」。この偉大なるブラック・ボックス！　これは、「中国から来た」という文言よりも、さらにたちが悪いシロモノかもしれない。

さて、第三点目は、著者の考察の対象が、中国以外では、おおむね古代オリエント世界に限定されてしまっているという事実である。このことは著者自身が「世界的視野に立って中国の女神の全体像を見直す必要を痛感し」ている（一六九頁）、と自己の心境を吐露しているから、「世界的視野」は著者にとっても垂涎の的といってよい研究のありかたなのであろう。ただし考察する地域を無闇に広げると井本英一になってしまう。しかし、これを相当の覚悟を持って行えば、南方熊楠になれる。私は終始一貫して南方派である。

私のつたない感想と印象は以上のごとくである。著者の更なる研鑽を祈ってやまない。

〔慶應義塾大学出版会、二〇一三年、六〇〇〇円〕